

## オーストラリア・スポーツの現状 ー平成16年度海外研修報告ー

### Present conditions of the Australian Sports

朝倉利夫

Toshio ASAKURA

期 間 平成16年4月1日～平成17年3月31日  
変 更 平成16年5月26日～平成17年5月27日  
場 所 オーストラリア・シドニー大学

私は海外研修の場所として、オーストラリアのシドニー大学を選んだ。オーストラリアは2000年に自国のシドニーで開催したオリンピック競技大会で58個のメダルを獲得し、メダル獲得では世界第4位の成績を取っていた。オーストラリアは何故スポーツ競技が強く、世界的な活躍をしているのか、その理由を調査研究し、今後の日本における競技力向上に役立てることを目的にして、ここを研修の場所に決めた。

研究内容は、大学スポーツ、オーストラリア・スポーツの現状、及びナショナル・トレーニング・センター視察、レスリング競技の現状調査研究であった。

#### ○オーストラリア・大学スポーツ競技の現状

オーストラリアの国土は、日本の21倍、世界で6番目に広い国であり国土の3分の1は、熱帯雨林や砂漠といった熱帯性気候である。シドニーのあるサウスウエールズ州は寒暖の差が少なく、年間の最高気温が25度、最低気温10度と快適な土地柄であった。シドニー大学は町に中心から2キロ

程離れた位置にあり、生徒数約30,000人、そのうち16%の留学生が在籍している。他にシドニー市内に5つのキャンパスを要している。シドニー大学は1850年に設立され、オーストラリアで最も歴史の古い国立大学であり、また非常に国際的で世界中のさまざまな地域と深いつながりを持っている。医学部をはじめ18の学部と単科大学から構成され、成績評価に関しては非常に厳しい大学であった。

オーストラリアスポーツと言えばラグビーがすぐに思いだされて来る。やはりラグビー人気は非常に高い。ラグビーには3種類ある。1つはラグビーユニオン (ARU)、日本のラグビーと同じルールで行われているもの。2つ目はオーストラリアン・フットボール・クラブ (AFL)、長円形の大きなグラウンドを使用してオーストラリアン・ルールで行われ、ボールを蹴るのだけでなく、手でつかむことも出来るが、バウンドさせずに15メートル以上ボールを持って走ることは禁止。又ボールを手で投げることは禁止。味方選手にパスする時は、ボールを握りこぶしで打って飛ばす、キックとパンチで相手ゴールを目指しキックしてゴールする。3つ目はナショナル・ラグビー・リーグ (NAR)、モール・スクラムがなく非常に過激なラグビーである。大学では、ARU・AFLのラグビーが行われ大学の中でも人気の高い種目で

ある。

女子の人気スポーツ競技はネットボール、長方形の専用コートを使用。長方形の中に2本のラインが引かれコート全体が三等分され、7名ずつチームに分かれボールをパス、キャッチし、3.05メートルの高さのゴールポストの先につけられたリングの中に、ボールを入れるゲームである。(ドリブルがなくパスのみでゴールを決めるバスケットボール。)

大学スポーツ大会を2度視察した。一つは、ニュー・サウス・ウェールズ州(NSW)大会。6月17・18日、ウロンゴン市にて開催(シドニー大学より約100km)。ウロンゴン大学を始め市施設、他大学、高校の4施設で20競技28種目の競技が実施された。各種目1位から8位まで得点が設けられその合計が大学の得点となる。シドニー大学はダントツで勝利を取めた。各会場までは車で移動。時間設定されていたので分刻みでの視察観戦であった。今回初めて観るスポーツ、特にネットボール・水球・テコンドー・フリスビー・グラウンドホッケー・女子ラグビーなど。日本では中々観戦出来ない種目であり感動感心させられた。

二つ目は、全オーストラリア大学選手権大会。9月25日～10月2日までウエスタンオーストラリア(WA)、パースにて26競技30種目が開催された。パースはシドニーより4000km飛行時間5時間。オーストラリア7州の各競技種目代表上位3チーム出場での戦いであった。シドニー大学は6連覇13回優勝を誇る強豪大学であり7連覇をかけた大会であった。競技は男子・女子・混合の3セッションで行われ、ラグビー・サッカー・水泳・テニス・ネットボールの試合はともに見ごたえのある試合であった。閉会式前の男子バスケットボール決勝は、1点2点を争う白熱したアメリカ(NBL)を思わせるような試合展開内容であった。団体成績総合優勝はメルボルン大学、2位シドニー大学であり、シドニー大学は9つの団体決勝に進んだが2つの優勝のみであった。参加学生選手は5千人であった。

### ○オーストラリア・スポーツの現状

オーストラリアは、オリンピック競技大会には、第1回の1896年から2004年の25回大会すべてに参加している。(他に、フランス・ギリシャ)シドニーオリンピック大会では数々の名勝負とすばらしい成績を打ち立て感動を与えた。又、パラリンピックに於いても20種目中16個の金メダルを獲得した。大成功に終わった影にはボランティア達の、活動活躍無しにはありえなかったと言っても過言ではなかった。ボランティアに対しての意識認識度は非常に高く、活動団体、地方自治体の組織力はすばらしいものであった。

スポーツ競技に於いて、水泳・水上スポーツ(ボート、ヨット)が優秀な成績を取ってきている。競泳と言えば、イワンソープの名が出てくる。シドニー・アテネ両オリンピック大会での金メダル。まさにスーパースターである。自国開催シドニー大会では、多額の強化資金援助を受け輝かしい成績を出したが、2004年アテネオリンピックでは、その強化資金援助が大幅に縮小削減を余儀なくされた。オーストラリアスポーツ全般が燃え尽き症候群と危惧されていた。しかし、アテネオリンピックでは、金メダル17個、銀メダル16個、銅メダル16個。総メダル49個を獲得し世界総合第4位であった。(日本のメダル獲得は金16個、銀9個、銅12個で総合第5位。これは、1964年東京オリンピック以来の大快挙であった。)オーストラリアは、種目水泳競技で8個(金7・銀9・銅9)自転車競技6個(金1・銀2・銅2)ダイビング競技8個(金3・銀4・銅2)又、射撃、陸上競技等に於いても期待以上の成果を出した。水泳、自転車競技に於いては1人で2個以上をメダル獲得している。競泳のイワンソープ選手は、国内選考会でフライングによる失格、物議を醸しての自由型400mレース出場。全国民の期待、プレッシャーを受け見事に金メダル獲得。水泳選手は元より他の競技種目選手の励みになったことであろう。自転車競技に於いては、大会前にドーピング

違反が発覚し、有望選手辞退となりどうなるかと心配されたが6個のメダル獲得であった。水泳・自転車競技の層の厚さに感銘した。

又、ボート女子エイトの決勝でチームの1人がゴール手前1600mで魯を漕ぐのを辞めボートの上に仰向けに寝そべってしまい、それまでメダル圏内にいた他のチームに追い越され、最下位に終わってしまった。あるはずのない出来事が現にオリンピックの検舞台で起きてしまった。チームメイト、関係者一同の今までの練習が台無しになり悔やみきれない結果であり多くの関係者の心情いかなるものであったか。本人曰く、全力を出し切り余力は残っていなかった、とのコメントであった。メダル確実、有望であればあるほど人間の力は何倍もの力が発揮できるものであると思う。彼女は、2年前(2002年)の、世界選手権大会でも同様の失態を演じていた。今後選手起用、選抜が大きな課題であろう。アテネから次の北京オリンピックへ向けた新たな強化体制が始まっている。オーストラリア人は、スポーツがライフスタイルに欠かせない重要な要素で、常に一緒になってスポーツに参加しスポーツ観戦をしている。特に人気はウォーキング・水泳・エアロビクス・サイクリング・テニス・ゴルフ等があげられる。

スポーツ参加を促進するために、さまざまなスポーツ教育システムプログラムが学校・地域社会で多く取り組まれています。子供や育児用にルールや内容を変えたスポーツの実施。水泳、サッカー、ネットボール、テニス、野球、ラグビー、クリケット等。

スポーツ会員制クラブが、全国に3万以上あり、それらの多くはひとつのスポーツを専門として100以上ある全国組織のいずれかに連携し、少年・少女の非行防止に役立っている。例(P・C・Y・C) Police Community Youth Club

オーストラリアスポーツ選手を、強化してオリンピックチャンピオンに育て上げたのは、強化練習はもとより自己意識の強さ、スポーツに対する生来の素質が備わった結果だけではない。AIS

(オーストラリア、インスチテュート、オブ、スポーツ)は、スポーツに重要な成功要因になっていることは明白である。AISに所属した選手がシドニーオリンピックでは32個のメダルを獲得し、アテネオリンピックでも同数のメダルを獲得した。AISの重要性を確信した。

### ○オーストラリア・ナショナルトレーニングセンター視察

オーストラリアスポーツ研究所(AIS)の中核が、キャンベラにあり、各州に1つずつAISの支所が在る。キャンベラの施設種目は、水泳・水球(50m・25mプール、回復のためのスパ)、体操場、バスケット・ネットボール・バレー・ハンドボール可能なコート6面、サッカー場(芝4面・人工芝1面)、陸上競技場、ボート競技(湖上インターナショナルコース1つ)、レスリング場マット2面、スポーツ医科学センター(スポーツ栄養・心理学・生理学・医学)、バイオメカニクス、マッサージ、他にインドアアリーナ、会議場、テニスコート、ウエイトトレーニング場などがある。又各州はその地域で盛んなスポーツを行っています。AISの施設なくして、シドニー・アテネオリンピックでの活躍はなかったと思う。実際メダリストの大半はAISの競技者であった。

AISはおよそ700人のスポーツアスリートと26競技36種目がある。支援援助は奨学金・学費の支給、無料施設提供、医療支援、国内外遠征費などである。オーストラリアスポーツ委員会(ASC)は、資金調達、スポーツ開発、競技団体への配分を行い、その配下にAISがある。AISは、学校体育を含めトップレベルの選手のみを強化するのではなく、発育発達に応じた基礎をしっかり学ばせてやるのがオーグスポーツである。小学生からスポーツ基礎運動から簡易ゲームなどの運動がある。運動スキルプログラム(投げる・打つ・蹴る・走る・跳ぶなど)がある。スポーツは安全且つフェアプレーの精神でなければならない。女性

(女児)にも出来るスポーツを奨励している。特に人気のスポーツにネットボールがある。(バスケットボールに似たドリブルのない球技)またティーボール(棒の上にボールを乗せて打つ野球)。他に約50種類の簡易ゲームがある。各個人にあったスポーツを体験見学してスポーツを飽きさせずスポーツから離れさせないカウンセリングプログラムもある。

日本も平成13年(2001年)10月に西が丘に国立スポーツ科学・トレーニングセンターが建設され、ナショナルトレーニングセンターも設備完備され、スポーツ振興基本計画10ヵ年で日本のスポーツ実施率を50%以上に増やす、また各競技団体に競技力向上に関しての課題も出された。今回のアテネオリンピックでは輝かしい成績成果を出した。センターが機能して2年目である。北京オリンピックではアテネ以上の成果が求められそうである。期待に沿えるよう各競技団体、日々努力精進するものと思われる。

### ○オーストラリア・レスリング競技の現状

レスリング競技人口は、300名弱。大会、競技会開催はシドニーオリンピック後、大会運営、強化資金、強化体制の機能がうまく機能していない状態であった。大会運営に関しては、各州の新理事、審判、ボランティア(選手の家族)で構成されていた。競技会は、各州月1回行われ、ニュー・サウス・ウェールズ州では、レスリング大会2回、サブミッションレスリング(絞め技、関節固め有り)1回。参加は自由(男女)、小学生・中学生、一般共、国際レスリング連盟ルールで行

われていた。試合は、レスリングマット1面、小学生に関しては発育発達上のためシューズなし素足でやっていた。レベル的には、少し劣るが数名の小学生が抜群の技術展開をしていた。両親の国籍戦歴を見ると、旧ソ連、東欧出身で、過去にオリンピック、世界で活躍していた。オーストラリアは、世界で最も移民受け入れが多い国である。子供たちの体格、柔軟性、瞬発力等の運動能力が優れ、必ずや近い将来世界、オリンピックに出場しメダル獲得も可能であると確信した。一般選手に於いては、2、3年前まで他国の代表選手として活躍していた選手も数多くいた。

シドニー大学の、レスリング部員は20名。活動は週4回。練習内容は、基本動作から試合に向けた総合練習。レスリング部員は20名。活動は週4回。練習内容は、基本動作から試合に向けた総合練習。クラブ部員は、他の大学生、高校生、女子部員と十人十色。シドニー大学の学生は、医学部・法学部の学生、卒業後は医者、弁護士、会計士を目的としていた。まさに文武両道を目的目標にしていた大学であった。

### ○総括

専門スポーツおよび運動選手に対しては、今後年間計画と目的意識を持った指導体制を確立し競技力向上に役立てて行きたい。海外研修で得た指導法、メンタル法を授業担当科目に活かし指導して行きたい。

海外研修に、派遣ご支援して頂き、深く感謝申し上げます。